

周遊型観光地における観光客滞在時間特性の分析

名古屋大学工学部

福岡真紀子

名古屋大学大学院 正会員

中村 英樹

名古屋大学大学院

増田 伸樹

1.はじめに

観光には地域振興策の切り札としての大きな期待が寄せられている。したがって、観光地の魅力の維持向上のためにも、観光地周辺道路の混雑解消や環境保全が重要な課題となっている。これらの課題に対処するためには、観光交通に配慮したきめ細かな交通計画や交通管理を行う必要があり、周遊行動や需要の時間的・空間的分布の変動特性など、観光交通の特性を的確に表現可能なツールの開発が望まれる。そこで本研究では、観光地における交通流動システムの開発を行うための基礎データとして、観光客の周遊行動を表現する上で鍵となる滞在時間や時間的移動特性の分析を行うことを目的とする。

2.周遊行動分析に際しての着眼点

本研究では、観光地域における周遊行動を、図-1に示すように各観光スポットへの到着・滞在・スポット間の移動の連なりとして捉え、時間の経過に伴いこれらをシミュレートすることを考える。観光客の帰宿判断や目的地選択に関しては別途モデル化を行うが、シミュレーションを行うためには、各種の時刻・時間に関する分布を観光スポットや観光客の属性に応じて統計的に把握しておく必要がある。すなわち、a)観光客がいつ対象地域内の最初の観光スポットに到着し(第一目的地到着時刻)、b)各スポットにどのくらい滞在し(滞在時間)、c)いつ対象地域から出て行くのか(旅行最終訪問地退出時刻)である。宿泊旅行の場合には、これらに加えてd)宿泊施設へ向かい始める時刻(宿泊前最終訪問地退出時刻)、およびe)宿泊施設を出て最初の訪問地に到着する時刻(宿泊後第一目的地到着時刻)が必要となる。

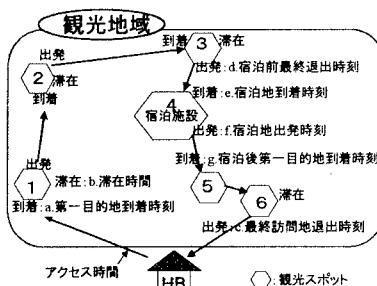


図-1 周遊行動の表現



図-2 分析対象地域(磐梯・猪苗代地域, 平成4年10月)

3.観光周遊行動に関わる時間特性の分析

3.1 分析データ

分析には、平成4年全国観光交通実態調査¹⁾の磐梯猪苗代地域(図-2)における入り込み調査データを使用する。本調査は平成4年10月18日(日)に実施された。この時期は紅葉シーズンで、夏休みと並んで当該観光地域が賑わう時期である。周遊データの有効個人サンプル数は1,504(日帰り791、宿泊713)であった。

周遊行動に関わる時間特性を左右する要因として、時間制約の異なる日帰り/宿泊の別や、観光客の居住地属性、観光スポットの属性などが考えられる。以下では、これらの観点から時間特性の相違の分析を行う。

3.2 観光地域における到着・出発時刻

観光地域における到着・出発に関わる時刻については、居住地からの当該地域へのアクセス時間別に日帰り、宿泊についてそれぞれ算出した。各カテゴリーのサンプル数とともに、a)第一目的地到着時刻、およびc)最終訪問地退出時刻の平均値と標準偏差をまとめて示したものが表-1である。ここで、「2時間圏」とは居住地から2時間以内で当該地域へアクセス可能なサンプルを意味している。この地域への観光客は、日帰りでは4時間圏から(83%)、宿泊旅行では2~6時間圏から(61%)の訪問がそれぞれ多くなっている。

(1)a)第一目的地到着時刻

アクセス時間の短い観光客ほど早い時刻に到着し、その傾向が日帰り客の方が顕著であることがわかる。また日帰り客は活動可能時間の制約から、宿泊客よりも早い時刻に到着して観光活動を開始する場合が多くなっている。なお、日帰りについては図-3にその分布を示した。

表-1 観光地域における到着・出発時刻特性

	アクセス時間	サンプル数	a. 第一目的地	c. 最終訪問地		
			到着時刻	退出時刻		
			平均値	σ	平均値	σ
日 帰 り	~2時間圏	381	10:44	1:42	14:30	2:37
	2~4時間圏	303	10:52	1:46	14:38	2:14
	4~6時間圏	85	11:56	2:07	15:02	2:02
	6~8時間圏	20	13:30	2:01	15:15	1:12
宿 泊	~2時間圏	39	11:51	3:22	14:23	3:14
	2~4時間圏	158	12:13	3:41	13:54	2:28
	4~6時間圏	85	12:23	3:15	13:34	3:06
	6~8時間圏	20	12:47	2:24	13:52	2:36

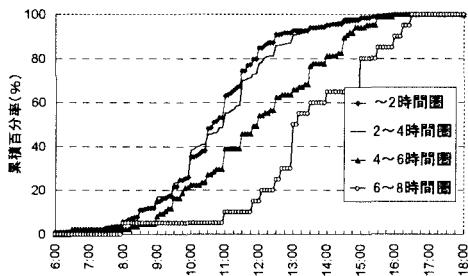


図-3 日帰り客のアクセス時間別第一目的地到着時刻

(2)c.最終訪問地退出時刻

宿泊客ではアクセス時間による退出時刻の差異が認められないのに対して、日帰り客はアクセス時間の短い客ほど早い時刻に退出する傾向が見られる。アクセス時間の短い日帰り客はこの地域へ再び来訪することが容易であることから、あまり欲張った行動をしないことによるものと推測できる。

3.3 観光スポット別滞在時間

日帰り/宿泊による違いはほとんどみられなかった。そこで、図-4のように観光スポット滞在時間の分布を道路交通センサスの9つのBゾーン(図-2)別に分析を行った。表-2は、これらのサンプル数と平均値を滞在時間の短い順に並べて示したものである。これらの結果より、A.(1)会津若松や(3)喜多方、(6)猪苗代南、(8)安達太良では1時間半程度、B.(4)五色沼や(7)吾妻、(9)白布では1時間前後、C.(2)磐梯町や(5)猪苗代北では40~50分の滞在というように大きく3つのグループに分けられる。そこで、それぞれのゾーンにおけるスポットでの活動構成率(図-5)をみると、滞在時間が1時間以上と長いAのグループでは、「みる・体験(食事など)」の活動の割合が高い傾向にある。

3.4 宿泊前後の動き

宿泊前後に関わる時刻の平均値と標準偏差を示したもののが表-3である。これより、d宿泊前最終訪問地退出時刻は平均14時52分であり、当日帰宅する客のc最終訪問地退出時刻(表-1)と比べて遅くまで活動している。また、g宿

表-2 ゾーン別スポット平均滞在時間

ゾーン	サンプル数	スポット平均滞在時間	σ
(5)猪苗代北	209	0:39	1:09
(2)磐梯町	10	0:48	0:54
(9)白布	74	0:54	1:39
(7)吾妻	452	0:59	0:59
(6)猪苗代南	546	1:03	1:33
(4)五色沼	1,083	1:14	1:29
(1)会津若松	617	1:16	1:26
(3)喜多方	274	1:28	1:45
(8)安達太良	118	1:42	2:00

表-3 宿泊前後の動き

	平均値(σ)
d.宿泊前最終訪問地退出時刻	14:52 (2:36)
e.宿泊地到着時刻	17:03 (2:17)
f.宿泊地出発時刻	9:35 (2:10)
g.宿泊後第一目的地到着時刻	10:52 (2:15)

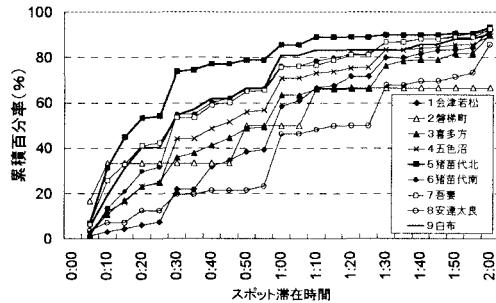


図-4 ゾーン別観光スポット滞在時間分布(日帰り+宿泊)

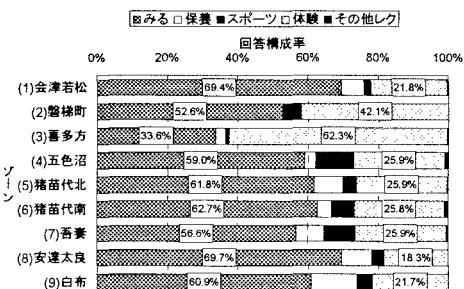


図-5 各ゾーンにおける観光スポットでの活動構成率(%)

泊後第一目的地到着時刻は平均10時52分であり、当日自宅を出発する客のa第一目的地到着時刻(表-1)と比べて早く到着し、活動を始めている。このことより、宿泊客はゆとりをもって活動していることがうかがえる。

4.まとめ

日帰りと宿泊、観光客の居住地からのアクセス時間、観光スポットにおける活動特性による、出発/到着時刻や滞在時間に関する相違を分析した。今後、これらの結果を用いて各種のモデルを作成し、観光地における交通流動シミュレーションの開発を行う。

参考文献

- 建設省土木研究所：全国観光交通実態調査、土木研究所資料第3270号、1994.2.